

第五章  
逆さの鏡

夜の寒さは厳しいものだった。幾度か親切な遊牧の民に世話になって、ここ半月ばかりは雨風をしのぐこともできた。しかし昨晩は遊牧の民にも出会えなかった。

チュンオウの石と紙で火をおこし、リビの不思議な香りの茶を飲んで、冷えた身体を温めた。朝食の後にすぐ歩きだし、昼過ぎにヒエミチリアスの街に着いた。

街とは言うものの、アルタスが住んでいたような布の家が集合しているだけで、デニアのような大きな市場は見つからない。

時折牛の引く車が通る。荷台には山ほどの毛織物。家畜は牛より羊が多い。それ以外で見かけるのは兵士の姿ばかり。

「こういうのも、街って言うのか？」

「……城下町にしては、確かに大きくはないな」

チュンオウは、リヨウキの上から見渡した後で言った。

トゥラスは自分の視界の範囲で観察を試みた。すると、アルタスの家とこの街の家の違いが見えてきた。

アルタスの家は遊牧民で移動を強いられるので、いつでもばらばらにしてしまえるような造りであった。しかしこちらは、外見さえ似ているものの、根を下ろしているのが良くわかる。柱は地中深く打ちつけられており、頑丈そうな木の扉までついている。扉が開いている家の中を覗くと、木でできた床が見えた。

「ホピネスの遊牧住居をそのまま根付かせたような街だな」

リビの形容はその通りで、トゥラスは素直に同意した。

「なあ、あれは何だ？」

トゥラスが先ほどから気になっているのは、土の山だった。土が山のように盛り上げられ、そこに木が生えている一角がある。

「どうして土を山のように盛り上げてるんだ？」

「それは逆だ。あれは山を切り崩した痕だ」

チュンオウが、悲痛さをおぼろげに映した顔で言った。

「あれが山……？」

よく見ればそれは山だった。土を盛り上げた後に木が育ったのではない。木々と共に、

山が切り崩されたのだ。

「……なんで切り崩すなんてこと！」

きつく投げかけてしまった自分の問いに、リビが諭す。

「生活のためだ。ああしなければ、居住のた

めの木材なども手に入らない。それにこの辺りの大地は砂礫が多く農耕に向いていないから、あの土を農耕に使おうとしたのかもしいれない。もしくは、金属や宝石を掘るのが目当てだったのかもしれない」

そう言われると、うまく反論はできなくなった。山や木がかわいそうだとか言ったところで、単なる綺麗事にしかならないだろう。やめろと言うなら、生活を潤す他の方法を挙げなければ意味がない。それも思いつかないので、リビの言葉を受け止めるだけしかできなかった。

やり場のない思いでその山を見上げてみると、背後から声をかけられた。

「あんたたち、兵士志願の人たちかい？」

織物の街であることを想わせる民族衣装の女がいた。

「宿ならうちに来てくれれば安くしとくよ。どうだい？」

「一つお聞きしたいのだが……」

チュンオウがリョウキの上から問うた。

「ここでは王より王子の方が人気と聞くが、戦の主導権はどちらが握っておるのかな？」

「そりゃあ、王様だよ」

腰に手を当てて、女は嘆息した。

「王子は気も優しく強いかから老若男女問わず人気はあるけれど、やっぱり王様だよ。でも今度の戦は王子が軍を統率すると聞いているから、志願兵が多くてね。特に遊牧民に人気があるから、あっちの方から来る武人が多いよ。それでも足りないから、他の国からも兵を募ってるんだけどね」

「戦は王と王子の考えなのですか？」

「そうじゃないかい？ まさか王子が戦に

出るとは思わなかったけれどね」

女は肩をすくめた。リビが一步前に入る。

「あなたは戦の理由を御存じですか？」

「私らにもっと肥沃な土地と食糧を与えて下さるためさ。頼もしいじゃないか！ 私は期待しているよ。ついこの間、隣のエリノワを支配したとたんに食糧の配給があったからね。それで私らは食いものができて助かったのさ」

チュンオウが難しい顔をしていた。リビも何か思うところがあるらしい。支配がどういうものなのかよくわからないトゥラスであったが、あまりいい気分ではないのは確かだった。

「宿を貸していただくか」

チュンオウが言うと、女は顔を明るくした。

女の後についてゆくと、あの白い家に連れ

て行かれた。だがずいぶんと小さいので、客用の別棟なのだろう。彼女が住んでいるのは、多分隣の大きな古い家の方だ。チュンオウが小さい家の方にリョウキを繋いだ。

「金でも物々交換でも、交渉には乗るよ」

女がそう言ってくれたので、チュンオウはいつものようにいくつかの玉を見せた。しかし女は腕を組んで唸った。

「そっちの袋はなんだい？」

女が指差したのは、トゥラスが肩にかけていた麻袋だった。

「そちらは食糧ですが」

「私はそっちの方がいいね。中身を見せておくれよ」

チュンオウが視線で促したので、トゥラスは中を見せてやった。中身はデニアでもらった食糧の一部だ。割るのにはなかなか硬そう

な木の実や、豆、硬いパンのようなものもある。

「いいものばかりじゃないか！ こっちをくれるなら、二晩は貸してやってもいいよ」  
「それはありがたい。ではその袋をお渡ししよう」

チュンオウがそう言うので、トゥラスはそれを女に渡してやった。

「ありがたいねえ。最近この辺りでもあまり食糧が流れてこなくなったからさ。助かるよ」  
女は麻袋を嬉しそうに抱えて、早々にその場を去った。

小さな家に入ると、狭い所にベッドが四つと小さなテーブルが一つ置かれていた。扉を閉めると、真っ暗になる。この家は天井に穴は開いておらず、しっかりと雨風をしのげるようになっていた。明かりとりの窓もあるが、

チュンオウとリビはトゥラスの性質を知っているので開けようとはしなかった。

代わりにリビが小さなランプに火をつけた。我慢できるほどの小さな光の中で、トゥラスは日光避けのフードを外した。

「やはり戦の拡大は現実ですね。時間の問題です」

## 第五章 逆さの鏡

リビがランプをチュンオウのそばへ置いた。ベッドに腰掛けたチュンオウが、重々しく頷いた。

「遊牧の民は王子を慕っているようだが、王子も戦に行くとは、好ましくないな」

「ええ。遊牧の民が王子を餌に狩りだされると、やはりそれだけ軍は大きくなります。それは戦の拡大も意味するところでしょう」

そう言うと、リビは立てかけた生首の杖に視線をやった。

「夜鷹が気になります。昨日の夕方の夜鷹、こちらの方に飛んでいきました。もしかすると、夜鷹の主はヒエミチリアスの王を指しているのかもしれない。世の均衡を崩す夜鷹の主がヒエミチリアスの王というのは、つじつまが合ってきません」

チュンオウは唸って、腕を組んだ。リビは続けた。

「夜鷹の主を探す必要があります。もしヒエミチリアスの王が夜鷹の主であれば、王が世の均衡を崩していることになります。それなら王をどうにかすれば、戦火も治まりました。……ただ、どのように確かめるかが問題ですね」

そこまで言ってリビも考え込むので、トゥラスは嘆息交じりに言ってやった。

「それなら城に行ってみてくりゃいい話じ

やねえか」

それにリビがため息と共に言った。

「だから、それをどうするかが問題なんだ。

兵士志願だと言っても、異国からの者では王

に謁見えっけんなどできまい」

「関所でやったような、商人になりすます作戦は使えないのか？」

「お前な、本当にヒョウビを売る気か？」

「それは嫌だね」

即答したトゥラスに、「だからこうして考

えているんだ」と、リビが冷やかな目を向

けてきた。トゥラスは言い返せなくなって黙

ったが、ふと良い案が思いついた。

「俺が確かめてきてやるよ。その夜鷹の主っ

てやつを」

リビとチュンオウが怪訝な顔でこちらを

見た。

「どうする気なのだ、トゥラスよ」

心配そうにチュンオウが言うので、トゥラ

スは不敵に笑ってやった。

「爺さん、俺に会った時のこと覚えてないのか？」

真っ暗な夜の森でチュンオウを助けたのは、トゥラスとトゥラスの兄弟だ。

「夜は俺たちの時間だぜ？ 見くびってもらっちゃ困るね」

ヒョウビも頼もしく喉を鳴らした。

「誰もが寝静まった真夜中に、夜鷹の後を追えばいい。もし城に入って行くなら、中まで

追ってみよう」

「お前、城に潜入する気なのか！」

突飛なトゥラスの意見に、リビが語気を強めた。

「そのくらい楽勝だ。あの城、いくつも窓があった。城は石を積み上げた造りだし、あれなら壁も登れる」

「それは危険だ。衛兵もいくらかおろう」

チュンオウが険しい顔で言ってくるが、トウラスも考えるところがあつての発案だった。

第五章 逆さの鏡

「……俺だって、戦を止める手伝いがしたいんだ。この世界を、アルタスが戦に行かなきゃならない世界にしたくないんだよ。戦のない世界にするって、アルタスと約束したんだ」

まっすぐにチュンオウを見て言った。チュンオウはしばし考えた様子を見せ、それからようやく深く頷いた。

「トウラスよ、そうだ、お前は強い。この中では一番身軽であろうし、虎の知恵を授かっているお前であればうまくやろう。……任せ

たぞ」

「ああ。任せろ」

トウラスは笑みをたたえて頷いた。

そこに、小さくりビの吐息が落とされた。

「仕方ない。ならば私も手伝おう。どの夜鷹が水たちの言う夜鷹なのか、それを確かめねばならない。それは私が引き受ける。私が示した夜鷹を追え。それから城のそばでも控えていよう。もしもの時に何かできるかもしれないからな」

「私もリョウキと共に城の傍で待っていよう。リョウキは駿馬だ。しゅんめ 急ぎ撤退が必要になれば、リョウキの力が必要だ」

トウラスら三人は頷き合って、ひとまず作戦会議は解散となった。トウラスは夜に備え、ベッドに横になった。そこへヒョウビもやっ



てきたので、ヒョウビの毛並みを撫でてい  
と、久々の寝心地の良いベッドはすぐにトウ  
ラスを夢の中へ誘った。そして意識はずっと  
深いどこかへ引きずり込まれていった。

暗闇が広がっている。そこは光も何も見え  
ない、上も下も無いところ。だが、何かざわ  
ざわする。形のない闇が動こうとしている。  
だが、まだ動かない。

足を踏み出してみると、地面などないはず  
なのに足は受け止められた。一步、また一步。  
歩いて、そして駆けだした。だがすぐに立ち  
止った。ずっと先も闇、走ることに意味がな  
いように思えた。

すると、不意に遠くから、喉の息を短く切  
るような鳥の声が聞こえた。そうかと思えば、  
顔のすぐ横を夜鷹がすり抜けた。

夜鷹は闇の中の何かにとまると、翼を閉じ

たまま顔をこちらに向けて、黄色い眼でこち  
らをじっと見た。

夜鷹ははっきり見えるのに、夜鷹がとまっ  
ているものは見えなかった。夜目が利くはず  
のこの目を細めて見ても、何も見えない。近  
づいて見てみようと思いついたが、トウラス  
が近づいていくと夜鷹は闇に飲み込まれて  
消えてしまった。

「待て！」  
手を伸ばしてそう叫んだところで、目が覚  
めた。

不思議な夢だった。

こういう夢は起きるとすぐに忘れて、おぼ  
ろげにしか記憶に残らないはずだ。しかしこ  
れはたった今体験したものののように身体に  
感覚が残っている。闇のざわめき、夜鷹の翼  
が作った風。頬に残った羽ばたきの残骸が現

実を混乱させる。

「トゥラス！ 夜鷹だ！」

外に出ていたリビが、扉を大きく開けて駆けこんできた。

それを聞くや否や、トゥラスはベッドから跳ね起きた。日避けの布を慣れた手つきで巻き、立てかけていた剣を持った。チュンオウもすぐに外に出た。

空を見上げると、すっかり夜空になっていた。月と星が輝いている。トゥラスはフードを邪魔だと降ろした。

夜鷹が空でくるくると回っている。先程見た夢を思い出した。闇の中に消えていった夜鷹は、あの夜鷹に違いない。

リビは杖を握り、目を閉じて集中していた。

生首の中の水が、揺らしてもいないのに波打っている。次にリビが目を開けると、視線を

空の夜鷹へ向けた。

「あれだ、間違いない。追うぞ！」

トゥラスは走りながら、夜空の夜鷹を目で追った。夢では見失ったが、今度は逃がしてなるものかと。トゥラスのすぐ横で、ヒョウビも背をうねらせて走っていた。

夜鷹の入ったところは、やはり城だった。

城は石を積み上げられて作られた高い建物だ。近くに塔が幾つもあるが、王たちがいるのは一番奥の大きな建物に違いない。幾つも窓があり、ちらほらと灯りがついている。

あのどこかに夜鷹の主がいるはずだった。

案の定、夜鷹は左から三番目、上から二つ目の明るい窓に入って行った。

「あそこか……」

トゥラスは守衛の兵に気づかれぬように、少し遠くにある家畜の小屋の影から見上げ

ていた。幸いこの時間はもう街の者は寝静ま  
っているようだ。しかし時折光が漏れている  
家もあるので、やはり気をつける必要はある。

背後から、静かに蹄ひづめの音が聞こえた。リ

ヨウキだ。チュンオウと、リビも乗っている。

「やはり城だったようだな」

リビはリヨウキから降りて、トゥラスのそ  
ばで声をひそめた。

「行けるか？」

「ああ。あそこなら簡単だ。近くに木がある。

あれを登ればすぐだ」

「暴れるなよ。面倒なことになる」

だが後ろから、チュンオウが言う。

「もしもの時はかまわぬ。命を優先にするこ  
とを忘れるな。危うくなったら逃げ、また出

直せばいいだけのこと」

「わかった」

城は、低い城壁が張り巡らされていた。ど  
うやら城壁は登るしかなさそうだ。

「ヒョウビは無理だな。俺だけで行こう。ヒ  
ョウビ、爺さんたちと待っていてくれ」

ヒョウビは月光で光る目で、じっとトゥラ  
スを見ている。それを納得ととらえて、トゥ  
ラスは「行ってくる」と残し、守衛のいない  
城壁に静かに走った。

剣を腰から外し、剣を腰に止めていた紐の  
片方を鞘にくくり直した。紐のもう片方の端  
は手で握り、剣を柄を上にして城壁に立てか  
けた。それを足がかりにして飛び、トゥラス  
は軽やかに城壁の上に着地してみせた。握っ  
ていた紐を手繰り寄せ、剣を引き上げる。

夜に紛れて、城壁から城を一望する。空は  
星空のはずだが、黒い森のせいで闇にそそり

立つ悪魔の城のようにも思えた。

「さあ、もうここは俺の縄張りだ」

夜風が白い髪を幾重も撫でる。久々に夜を

共としての行動だ。虎の血が騒ぐ。森にいた

頃は、こうして暗闇に息を殺して獲物を狙っ

ていた。だから暗闇の中に気配を消して動く

のは十八番だ。ようやく自分の得意分野が回

ってきて、トゥラスの胸は高鳴った。

月光だけでもトゥラスの目には充分だっ

た。この城壁を降りて、いくつかある塔の影

を經由して一番奥の塔まで行く作戦だ。そこ

で様子をうかがって、安全ならば城に潜り込

もうとトゥラスは考えていた。

トゥラスは音も無く城壁から飛び降り、見

張りの目をかいくぐって一つ目の塔にたど

り着いた。高い円柱の塔だ。塔の奥に誰もい

ないのは気配で分かったので、一気に裏に回

った。それから同じようにして次の塔へ。同

じ手順を幾度か踏んで、城に一番近い塔まで

行った。

「ちよろいな」

次に城の横にある木に向かった。枝は高い

所にしかなく、木の幹も滑りそうだった。だ

がトゥラスは剣を片手に大きく跳躍し、空い

ているもう片方の手で枝をつかんだ。後は腕

の力と腹筋で片足を枝にひっかけ、くるりと

上半身を起こして枝の上に乗るだけだ。こん

なことは、森では日常茶飯事だった。こうし

なければ採れない木の実もあった。

一つ枝に登れば、あとは茂っている太い枝

にどんどん登って行き、夜鷹の入った部屋の

高さまで登ればよかった。

しかし枝から夜鷹の入った部屋までは距

離がある。まずは一番手前の窓に飛び移るし

かない。

トゥラスは一番手前の窓に飛び移った。窓枠の端ぎりぎりに着地し、そこから警戒しながらそっと窓を覗きこんでみた。すると、突然目の前に空を切って何かが飛び出してきた。

「うわっ！」

慌てて体制を立て直す。今のは多分槍だ。トゥラスは舌打ちした。

「誰だ！」

これはまずい。さっさと黙らせなければ大騒ぎになる。

トゥラスは鞘のついたままの剣を窓の中に放り投げて、見えない相手の隙を作った直後、その間に窓に飛び込んだ。着地の後、すぐに体制を立て直して、目の前の兵士を蹴り飛ばした。

しかしすでに五人ばかりの兵に囲まれていた。どうやらここは見張り番の待機場所だったらしい。厄介なところに入ってしまった。それでもトゥラスは慌てずに、闇は己の地の利とでもいうように、少ない明りで兵士が慌てるどころを、音も無く拳と脚で黙らせた。

全員が多少の呻き声と共に沈黙したところで、トゥラスは放り投げたままだった剣を拾い上げ、注意深くその部屋を出た。

暗闇の廊下に、一筋光がさしているところがある。あそこが、夜鷹の入った部屋だ。入り口に一人見張りの兵がいる。

「おい、どうした？」

先ほどの物音を聞きつけてだろう。廊下の壁のくぼみに入れてあったランプをとって、見張りの兵がこちらにやってきた。獣のように闇に闇に身をひそめるトゥラスは、その灯

りに照らされる前に風のように走った。  
兵のところまでいくと、ランプの光の中に入  
ったトゥラスは、獣の眼で兵を捉えた。

「あ……わあっ！」

兵は震える声を上げたが、刹那トゥラスは  
彼の鳩尾に肘を入れた。短く呻いて男は崩れ  
る。もう起きてきそうもなく、完全に気絶し  
ていた。足で小突いても、起きる気配はなか  
った。

## 第五章 逆さの鏡

「やっぱり普通の人間はこうなるよな」

デニアの市場の男を思い出す。すぐに復活  
したあの男が、やはりただものではなかった  
だけだった。

「何かあったのか？」

部屋の入口に垂れ下がった絨毯のような  
幕の奥から、男の声が聞こえてきた。夜鷹の  
主だ。

こうなったら、正々堂々正面から確認して  
やろうとトゥラスは思った。夜鷹の主が闇を  
広げるなら、やつには聞きたいことや止めさ  
せたいことは山ほどある。

トゥラスは剣を抜き払って、絨毯の幕の隙  
間から中に滑り込んだ。そのままぐるりと身  
体を反転させ気配の先に刃を向ける。刃の先  
には、肩に夜鷹を乗せた青年がランプを持っ  
て立っていた。

トゥラスに剣を向けられた青年は、半歩退  
いた。しかしたったそれだけで、青年は逃げ  
るでもなく声を上げるでもなく、そのまま固  
まったように動かなくなった。

夜鷹を肩に乗せた青年は、驚いた顔でこち  
らを凝視していた。その顔は、トゥラスの顔  
だった。トゥラスは自分に剣の切っ先を向け  
ていたのだ。

どうしてそこに自分がいるのだろうか。混乱で時が止まった。

息さえも止まった気がした。しかし鼓動だけは速まる。目の前の夜鷹の主は、顔を洗う時に水面に映る、慣れ親しんだ自分の顔だった。ただ一つ違うところは、黒い髪で黒い瞳であること。それを除けば瓜二つの全く同じ顔だ。まるで色を逆さまに映す鏡を見ているようだった。

## 第五章 逆さの鏡

「お前は……誰だ！」

黒いトゥラスが先に聞いた。トゥラスはまだ動けないでいたが、呼吸を整え、ようやく言葉を放った。

「……お前こそ、誰だ」

「私はヒェミチリアス王子、フェリスホピネサリアだ！」

「ホピネサリア……！」

黒いトゥラスは困惑を交えた眼差しで、それでも強く言い放った。やっとのことで睨み返しながら、トゥラスも言い返した。

「俺は……俺は、トゥラスホピネサリアだ」  
目の前の、黒い自分の目が大きく見開いた。一体これはどういうことなのだろうか、トゥラスの頭は混乱していた。世界を旅して色々な人間がいることはわかったが、兄弟以外で同じ人間がいるなどとは聞いたことがない。似ているという問題ではない。全く同じなのだ。目の色と、髪の色を除いては。そして似たような名前。同じホピネサリアという名を持っている。

「何故お前がホピネサリアの名を……。王族にしか継承されない名だぞ……！」

黒のトゥラス——フェリスと名乗った彼は、呟くように言った。

「……お前、親は誰だ？」

フェリスが声を震わせた。トゥラスはしばし迷ったが、答えることにした。

「産みの親は知らない。俺は森で育った。虎と、幼いころは養母のばあさんに育てられた」

「養母の名は？」

「……アンサリース」

その答えに、フェリスは複雑な顔で目を細め、声を絞った。

「私の……母の名だ」

今まで積み上げてきたあらゆるものが壊れる音が聞こえた。

トゥラスは、自分でもわからないいつの間にかに、彼に向けていた剣を下ろしていた。

森羅万象の子  
養母の名と彼の母の名が同じとは、一体どういうことを意味するのか。自分と全く同じ顔のフェリスと名乗る青年とは、何か大きな

繋がりがあるのは確かだ。

「少し、話をしよう……」

フェリスの方から言った。トゥラスは頷くこともなく、剣を鞘におさめた。フェリスが椅子を促してきたが警戒して、フェリスがすぐそばのベッドに腰掛けてからトゥラスはようやく座った。

しばらくお互い無言だった。トゥラスは何を話しているのかも、何を聞いていいかもわからなかった。夜鷹の主には言いたいことはあったはずなのに、目の前の彼には、どうしたらいいか混乱するばかりだった。

結局、先に言葉を発したのは、視線を落としたフェリスだった。

「母上は……高齡の出産の後に死んだと聞いた。名はアンサリース。父の第一妃だった」  
トゥラスは彼の話に耳を傾けた。彼が語る



のは、多分今まで隠されていたトゥラス自身の秘密だ。

「……私は、生まれた時に光の子と占われたそう。風の噂で、私のそれと同じように闇の子と占われた赤子がいたと聞いたことがある。その噂によると、闇の子はヒェミチリアスの未来のために殺されたらしい。そしてその子供が、生まれた時に悪魔の力で母を殺したのだと……。それは私の物心つく前に生まれた、弟か妹の話かと思っていた」

フェリスはその黒い瞳をこちらに向けた。自分と違う漆黒の輝きであるのに、自分に見られているような不思議な感覚が身体に染みる。

フェリスは、吐息と共に言った。

「双子だったのだな……」

白い自分と、黒い彼。森で育った自分とヒ

エミチリアスの王子であるフェリスが、同じ母親の胎内で共に生をうけたのだと言う。それならば……。

「ばあさんは、俺の産みの母親だったのか……」

自然と手は耳飾りに触れていた。血の繋がりもない自分のために、どうして生きるに厳しい森に住んでまで自分の世話をしてくれていたのか不思議でならなかった。白髪の交じった髪で痩せた身体でも、この頬を包んでくれた彼女の手は温かかった。それが支えてここまで成長できたのだ。思い返せば納得はできる。あの温もりは、産みの母親の温もりだったのだ。

「ばあさん……じゃない。母さんは、……死んだ」

今度はトゥラスが視線を落とした。申し訳